

中国社会変動における村落と家族

THE REPORT OF THE PROGRESS OF THE STUDY
-THE VILLAGE AND FAMILY IN CHINA SOCIAL CHANGE

中国社会変動における村落と家族

竹内啓
孫占坤
涌井秀行
共編

中国社会変動における村落と家族

THE REPORT OF THE PROGRESS OF THE STUDY
-THE VILLAGE AND FAMILY IN CHINA SOCIAL CHANGE

共編 竹内啓
孫占坤
涌井秀行

中国大躍進から文革期の人口激動 —全国における被害状況の計測—

涌井 秀行

I はじめに

1958年から1962年の「大躍進」期・「調整期」、つづく文化大革命期にかけて、中国でおきた飢饉については、驚くべきことが多い。この飢饉の存在は、海外はもちろんのこと、中国国内においても長い間隠され続けてきた。1978年の「改革・開放」以降に公表された人口統計によって、その人口激減の事実をわれわれは推測することができるようにはなった。だが、限られたデータであったために、現在でもはっきりしない点が多い。なぜ、どのようにして、このような人口激減が発生したのか。その規模はどれくらいなのか。どの地域なのか。省、県、町、村の各級行政レベルではどうだったのか。内陸部か沿海部か。農村部か都市部なのか。どの階層がどのような災害をこうむったのか。共産幹部党员は、下級党员はどうだったのか。性別ではどうだったのか。誰にその責任があるのか。どうしてこのように長きにわたって秘密にされてきたのか。さらにその時人々の生活の様子はどうだったのか。彼らはどう行動し、どうやって生き延びたのか。依然としてこの飢饉の全貌は、ベールに包まれたままである。

だが近年中国政府は、省・直轄市・県・郷・鎮各級にわたる詳細な人口統計を公表しつつある。例えば『中華人民共和国人口統計資料彙集 1949-1985』や『中国 2000 年人口普查資料』『中国郷鎮街道人口資料』などである。本研究の第1の目的は、まずこうした人口統計データを整理し、中国全土にわたり、地域（省・直轄市・県・町・村）、性別、年齢、階層など各レベルでの人口変

動をできるだけ正確に把握することにある。この作業の中で、被害の大きさを地域的に、年齢と男女別、階層別に把握し、最も被害が大きかった地域・性・年齢・層と反対に軽微であったそれらを特定する。この作業の後に、被害が重大であった地域と軽微であった地域の経済、権力構造の分析を行う。農業生産力（作物の種類・作付面積・収穫高）と「人民公社」方式による生産管理・関係と分配状況、さらに都市部への食糧供給・徴発を究明する。おそらく被害・激変は農村部が深刻であったと思われるが、これらの分析によって、農村部の飢饉の深刻化を明らかにすることができると考えられる。

飢饉の最大の犠牲者は農民であったと思われる。彼らは本も書けなかったばかりか、外部のものに話す機会もほとんどなかったはずである。この時期における飢饉の研究は、中国政府に対する政治的な「配慮」も含めて、厳しい状況にあった。事実「中国・飢饉（飢餓）」の表題を掲げた論文、著作は見当たらないし、いくつかのデータ・ベースや新聞（朝日、日本経済）においてもこうしたタイトルを掲げた論文、記事等は見当たらない。これまで私が調査したところでは、十分な研究はなされていない。むろん、辻康吾編『現代中国の飢饉と貧困、2000万人餓死事件への証言』や丁抒著、森幹夫訳『人禍、餓死者2000万人の狂気、1958～1962』『飢餓、秘密にされた毛沢東中国の飢饉』など貴重な研究もあるが、証言集やルポルタージュである。これらは人口統計や経済社会構造分析という社会科学的方法論に立脚した分析にはなっておらず、総合的な把握にはなっていない。本研究はこうした限界を破り、総合的に飢饉の分析に取り組むものである。

そこで現在刊行されている人口統計にもとづき全国レベルでの飢饉の実態把握を行い、最もひどかった地域と比較的打撃が少なかった地域を特定する。こうしたマクロ的な分析を踏まえた上で、飢饉を生き延びた農民からの飢饉についての聞き取り調査を行う。当時の村落の人口・日常生活・飢饉の発生・被害状況・結末などについてインタビューする必要がある。当時15歳だった人は現在

60 歳、20 歳だった農民は現在 65 歳になっている。飢饉の状況を記憶する人々の高齢化が進んでいる。中国の平均寿命 68 歳を考えると、この 2、3 年が最後のチャンスと考えられる。こうした聞き取り調査によって飢饉の現状をかなり具体的に把握にすることができるようになるであろう。ただし、農村での調査・インタビューには細心の注意が必要である。

中国の飢饉は、ソ連のそれと構造が酷似している。「社会主義」中国の建国と維持は、世界大戦の渦の中にたたされ、戦争（破滅）か、社会主義（平和とパン）かの二者択一を迫られた 1917 年からはじまるソビエトの状況と相似形ではなかろうか。後者社会主義が選択された 1917 年の革命の後、レーニンが後れたロシアの経済構造、軍事的封建的な資本主義国を、内戦と干渉戦争・列強による包囲網の中で救済見通しをたてたとき、その方策は必然的に戦時共産主義体制となった。それは、余剰穀物を全部中央ソビエト権力の手を集めて、「正しく」配分することであった。トロツキの簡潔な性格規定によれば、戦時共産主義体制とは「国家（軍隊）による農民からの食糧資源の徴発とその都市住民への均等な分配＝配給、そして国家の官僚的指令による、軍需生産に特化した工業生産への資源の傾斜的分配システム」であった。この戦時共産主義は、周知のとおり内戦の終結、帝国主義列強の干渉戦争の撃退とソビエト・レーニン政権の維持という目的は果たしたものの、死者 1300 万人の犠牲と経済の極度の疲弊をまねいた。社会主義国家の建国実験が無菌室の中で行なわれることなど到底考えられないとしても、あまりにも大きな犠牲だった。ソビエト・レーニン政権は戦時共産主義の終結とともに経済の再建にとりかかる。1921 年「食糧徴発制度」を転換し「食糧税」の導入という「新経済政策（ネップ）」にふみきる。緊急避難としての「戦時共産主義」の方途は転換され、後れたロシアの発展にとって避けて通ることのできない道、資本主義的発展の道が提起された。提起された第 1 の具体的政策は「利権事業」を開始することであった。「利権事業」とは、国有の施設や資源などの生産手段を資本家・企業家に貸し

出すことであつた。「経済関係の見地からすれば、利権とはいつたいなにか。それは国家資本主義である。・・・・・・社会主義国家権力は自己に属する生産手段——工場、資材、鉱山——を資本家に提供する。資本家は、請負人として社会主義的生産手段の賃借人として仕事をし、自分の資本に対して利潤を受けるとともに、生産物の一部を社会主義国家に引きわたす」。ソヴェト権力が資本家と契約を結ぶ。その資本家とは、無論西ヨーロッパの資本家である。レーニンは、権力が労働者階級、レーニン政権の手中にあり、利権を統制しうることを前提に、国外資本とのリンクを足がかりに社会主義建設を展望したのである。同時に肥大化してゆく小規模生産、小経営の協同組合化を推し進めようとした。すなわち彼は、「市場経済の導入による商業と資本主義的経営の復活を許し、それを協同組成的、国家資本主義的発展の方向に国家が規制してゆく」ことに、社会主義経済体制構築の展望を見出していた。レーニン死後この道は遮断される。トロツキ、ブハーリンやスターリンらの党内論争を経て、結局はスターリン派指導部の「農業集団化の強行、超工業化、『文化革命』などを構成要素とする一連の措置」によって、ネップの道は切断されてしまった。その後ソ連は、1928年の第1次5カ年計画を皮切りに、「社会主義計画経済」の道をひた走ることになるわけである。

歴史は繰り返すという。この過程が中国に重なる。異民族による植民地支配からの脱離、独立・自立こそ、魯迅であれ毛沢東であれ自覚的な民衆であれ、近現代中国を造り上げた人々の宿志ではなかったろうか。日中戦争、国共内戦をへて達成された独立を維持するために、存在するすべてのものがつぎ込まれたとしても何の不思議もない。アメリカ帝国主義はいうに及ばず、盟友と信じたソ連も、中国にしてみれば代償を求めるアメリカ顔負けの（社会）帝国主義者であつた。北方ソ連との50年代後半からはじまる中ソ論争・国境紛争・武力衝突にそなえつつ、同時に南方でのインドシナ情勢の激化にとともなう、中国本土への侵略に中国は備えなければならなかつた。中国は米ソ冷戦構造の磁場の

真っ只中に立たされつづけ、国家存亡の危機にさらされつづけた。この点で解放以降も中国は準戦時下にあったといえる。少なくとも 1971 年、アメリカによる封じ込め政策が転換されるまではそうだったといえる。達成した解放と独立維持のために最良のものが最大限動員された。戦争に備えて攻撃されにくい内陸奥地に重化学工業基盤は移設され、軍事工業として強化された。三線建設である。「自力更生」・「大躍進」・急速な農村の「人民公社」化は、対ソ・対米戦争に備えた農村コンミュンとしての人民戦争陣地の再構築であった。これは「文化大革命」による人民戦争陣地の再々構築と強化へと連なってゆく。準戦時期に毛沢東・中国のとった対米・ソ対抗策は、農業剰余を農村から搾り出し軍需工業を強行構築する政策である。この政策は独立と共産党政権の維持という目的は果たしたが、同時にそれは 3000 万人が餓死したといわれる「大躍進」、40 万人の死者と 1000 万人の被害者を出したといわれる「文化大革命」という人的犠牲と経済の極度の疲弊をもたらした。

1949 年にはじまる中国の準戦時下の時期、ソビエトになぞらえれば「戦時共産主義」時期は、1970 年米中接近によって、ひとまず終わることになる。第 1 次 5 ヶ年計画の終了（1958 年）から大躍進、調整、文化大革命と続いた準戦時体制は、主敵ソ連を抱えたままではあるが、アメリカの接近によって、西側資本との「利権事業」を行う余地が生まれ、息継ぎが可能となった。1969 年対中国貿易緩和政策にはじまった米中の接近は、1971 年 10 月中国の国連加盟、翌 72 年の R・ニクソン訪中へと進んだ。毛沢東「自力更生路線」と周恩来「現代化路線」の妥協の産物である第 4 次 5 ヶ年計画が進められる中で、大型プラントが矢継ぎ早に導入された。「反毛・走資派の首魁」との批判を浴びながら失脚した鄧小平も 1973 年副総理に復活した。中国は、剰余内資を創出し、それを動員して後れた経済をのりこえる道をあきらめ、経済発展を国外蓄積＝外国資本に依存し、期間を圧縮して成し遂げる方向へと転換した。レーニン・ソ連がそうであったように、西側の資本家を引き入れ「利権」を提供して、疲弊し

た経済立て直しへと方向を転換したのである。これ以降、中国は「改革・開放」の道をひた走ることになる。

本研究は飢饉の分析にとどまらない。この飢饉を通して、われわれの研究の最終目的は、20世紀に存在した「社会主義」とは何であったのかを、闡明することにある。すでに述べたが中国の飢饉は、ソ連のそれと構造が酷似している。天災としての飢饉と、上からの強権的な統制の結末としての飢饉は大きな違いがある。後者は文字どおりの人災であり、社会主義体制そのものが引き起こしたものだといえよう。機械制大工業段階という歴史的環境のもとで20世紀の社会主義思想が実現しようとした「理想の社会」とは、国家さえひとつの大工場にみたくて、工場制度（機械制大工業の科学的管理）を手段とする官僚・専制機構のもとで、軍事主導型の中央集権的計画経済を特質とした、指令と動員によって稼動する社会とならざるを得なかった。20世紀の歴史段階においては、否が応でも「市場」に代わる生産調整機構「計画」はそうしたものとならざるを得なかった。遅れたロシア、さらに遅れた中国での「理想社会」の実現、すなわち「計画」は飢饉（究極の不足）にならざるを得なかったといえよう。

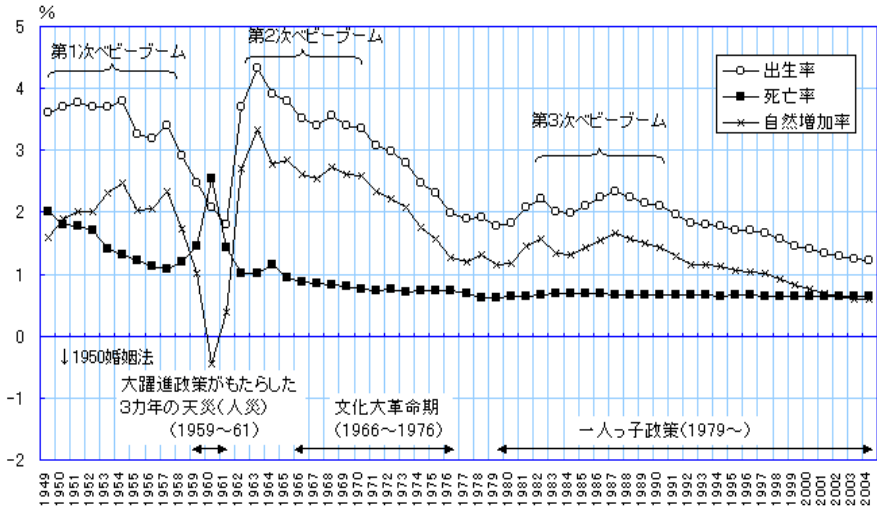
II 調査研究対象地域の特定

(1) 時系列的な出生死亡率

解放後の中国においては今日までに出生率に3つのピークがある。まず第1のピークは1949年から1957年にかけてである。土地改革（1946～52年）「耕者有田」によって土地を取得し、多くの農民が曲がりなりにも経済的自立の見通しを持つことを背景に、新中国成立後の1950年に制定された婚姻法をきっかけに結婚ブームが生じ、出生率が急増した。第2のピークは、1959～61年の「飢餓期」に伴う死亡率増加・出生率低下の反動で起こった1963～71年の出産ブームである。第3は、1980年代のベビーブームである。この出産ブームは、第2次ベビーブームの親たちが子供を産むことから生じた。しかしこのブーム

は、前2回のものと比較すれば、1979年から「一人っ子政策」が実施されていたので、出生率水準自体は抑えられ、グラフにおいてもなだらかな山となっている。

第1図 中国の出生率・死亡率の推移



資料出所：本川裕『社会実情データ図録』「中国の出生率・死亡率の推移」
 (本川裕作成ホームページ <http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/8210.html>)

こうしたから出生率から死亡率を差引いてみちびかれる自然増加率に注目すると、深く切れ込んだ1960年を底とする1958年から1961年にかけての事態は注目すべきである。

(2) 1960年時点での地理的(省別)死亡率

資料上の制約から『中華人民共和国人口統計資料彙編 1949-1985』(中国財政家財出版社、日本統計協会 CD-ROM 版、以下作成の表・図の資料出所はすべてこれによる)の各年の平均人口から(一般)死亡率=人口÷死者数を各省

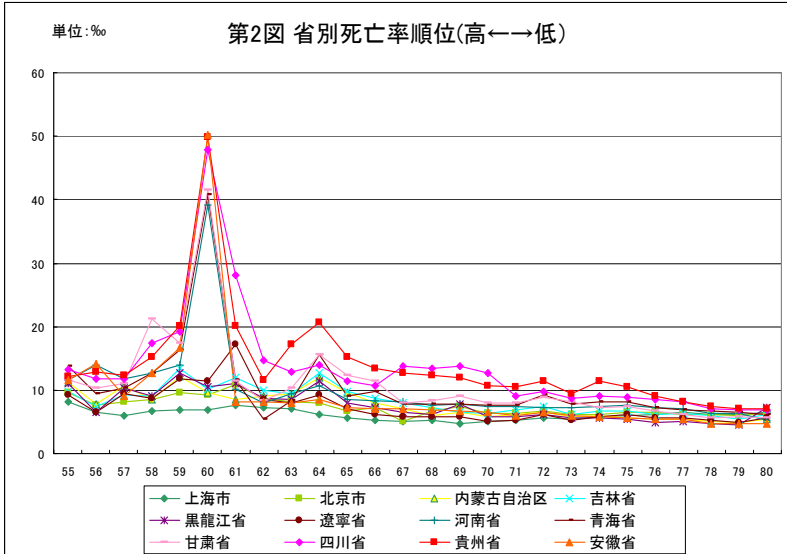
別に算出すると共に、「飢餓期」の特殊性を考慮して、人口の省別の流入・流出を加味して「総合的」に省別の被害状況を計測した。（本稿で省という場合、上海・北京・自治区など、省と同格の行政区も含まれる。原データの区分どおり）

第1表 省別人口

	省別平均人口数										単位：万人	
	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965
北京市	494.7	521.4	577.9	608.8	628.0	659.8	708.0	726.5	722.3	735.5	756.4	770.8
天津市	469.0	483.7	497.4	519.7	560.0	596.2	607.4	613.3	607.3	608.3	628.0	638.6
河北省	3426.5	3525.3	3576.6	3644.4	3689.3	3734.2	3762.6	3753.0	3810.6	3916.8	3981.8	4036.2
山西省	1459.7	1496.1	1538.6	1579.2	1615.4	1651.5	1693.8	1711.0	1727.6	1767.7	1807.2	1848.0
内蒙古自治区	780.0	822.3	869.8	916.3	961.1	1024.3	1126.8	1177.1	1167.5	1193.6	1234.5	1275.1
遼寧省	2123.8	2197.7	2308.6	2367.9	2434.3	2487.4	2541.1	2540.7	2532.0	2601.0	2693.7	2771.3
吉林省	1155.0	1191.9	1218.8	1243.2	1271.5	1304.2	1362.6	1409.5	1445.4	1506.8	1566.1	1617.1
黒龍江省	1232.9	1305.5	1382.9	1455.5	1542.2	1629.8	1752.2	1856.3	1895.3	1932.7	2012.7	2093.6
上海市	931.1	942.1	933.9	973.2	967.9	1014.0	1042.3	1057.6	1058.4	1065.8	1079.9	1090.0
江蘇省	3867.3	3963.0	4042.6	4158.9	4167.2	4175.5	4293.6	4257.9	4288.9	4387.4	4476.4	4567.7
浙江省	2322.8	2403.6	2420.9	2495.7	2558.4	2605.9	2636.9	2641.4	2672.3	2753.5	2837.5	2916.0
安徽省	3136.2	3192.8	3228.3	3315.7	3391.4	3436.1	3265.6	3036.6	3060.4	3182.7	3207.4	3233.4
福建省	1341.3	1366.7	1397.8	1439.2	1472.9	1532.8	1580.4	1596.2	1618.7	1659.0	1690.9	1731.6
江西省	1703.5	1752.1	1787.8	1834.7	1891.2	1953.4	2001.9	2020.8	2040.6	2079.6	2122.2	2176.6
山東省	5047.6	5191.8	5257.6	5403.8	5424.8	5460.7	5342.9	5301.7	5403.7	5544.0	5573.8	5658.2
河南省	4495.9	4495.7	4680.5	4855.1	4851.0	5025.6	4904.1	4787.1	4834.7	4969.7	5088.9	5169.6
湖北省	2822.2	2900.6	2942.2	3028.9	3119.1	3207.9	3208.1	3175.5	3228.4	3311.9	3383.9	3461.3
湖南省	3376.1	3441.2	3492.7	3574.8	3637.5	3702.3	3650.7	3548.7	3554.1	3657.7	3750.2	3843.3
広東省	3336.0	3417.1	3461.6	3541.3	3629.4	3714.5	3755.6	3796.6	3861.7	3960.5	4060.9	4189.7
広西チワン族自治区	1997.1	2046.7	2083.4	2128.1	2180.6	2209.5	2187.6	2165.7	2188.5	2258.7	2330.7	2403.2
四川省	6599.9	6719.6	6867.9	7013.1	7079.4	6987.6	6758.6	6539.5	6472.4	6590.7	6797.1	7017.6
貴州省	1530.4	1578.7	1614.9	1662.5	1703.4	1735.0	1708.6	1646.9	1646.5	1683.9	1727.8	1786.3
雲南省	1774.5	1803.4	1833.7	1882.4	1903.4	1924.4	1914.4	1903.5	1931.6	1992.4	2054.8	2121.0
陝西省	1628.0	1687.1	1740.3	1789.4	1823.0	1856.6	1922.3	1961.2	1988.1	2031.9	2078.0	2122.1
甘肅省	1164.6	1184.8	1217.1	1352.6	1339.1	1325.6	1299.1	1236.7	1225.4	1244.6	1269.6	1317.7
青海省	172.2	179.8	191.4	202.3	222.4	242.5	266.2	241.9	208.2	207.4	214.6	225.0
寧夏回族自治区	156.4	160.6	167.4	184.0	187.2	201.3	212.6	209.7	200.9	202.8	210.8	220.8
新疆维吾尔自治区	500.9	517.4	530.7	551.0	575.9	626.1	684.0	711.1	708.0	705.7	728.5	766.6
全国合計	60266.0	61465.0	62828.0	64653.0	65994.0	67207.0	66207.0	65859.0	67295.0	69172.0	70499.0	72538.0

第2表 省別死亡率

	省別死亡率													單位: ‰	
	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	
上海市	8.21	6.61	6.06	6.75	6.87	6.84	7.70	7.25	6.98	6.15	5.70	5.30	5.09	5.32	
北京市	9.60	7.57	8.10	8.57	9.58	9.22	10.81	8.71	8.11	8.03	6.70	7.24	5.02	6.78	
內蒙古自治區	11.20	7.75	10.69	8.44	12.22	9.66	8.61	9.15	9.38	11.91	9.60	7.92	7.11	5.97	
吉林省	9.84	7.50	9.23	9.07	13.35	10.07	12.04	9.96	9.44	12.62	9.70	8.62	7.96	7.25	
黑龍江省	11.02	6.46	10.38	9.13	12.71	10.47	11.12	8.67	8.56	11.50	8.00	7.30	6.53	6.24	
遼寧省	9.32	6.45	9.38	8.79	11.78	11.45	17.14	8.54	7.91	9.32	7.10	6.24	5.81	5.87	
浙江省	12.59	9.43	9.24	9.12	10.71	11.77	9.83	8.60	7.89	9.21	8.10	7.11	6.65	6.22	
陝西省	10.57	9.83	10.25	10.94	12.72	12.20	8.76	9.35	10.55	15.60	13.00	12.91	12.76	12.65	
寧夏回族自治區				14.10	15.81	13.88	10.71	8.49	10.22	13.44	9.30	9.44	8.10	5.40	
河北省	11.85	10.78	11.60	10.70	11.66	14.33	13.43	8.96	10.50	10.49	8.40	8.47	7.16	6.56	
山西省	12.85	11.54	12.61	11.67	12.78	14.44	12.20	11.34	11.44	13.98	10.40	10.26	8.40	8.26	
福建省	6.75	8.34	8.92	7.42	7.80	15.19	11.87	8.28	7.36	8.62	7.30	7.11	6.26	6.30	
新疆維吾爾自治區	14.59	14.00	14.06	11.85	19.19	15.40	1.02	9.54	9.44	16.35	11.10	9.33	9.24	9.21	
江西省	16.18	12.45	11.42	11.34	12.95	15.99	11.54	10.95	9.71	10.87	9.40	8.51	7.21	7.56	
廣東省	10.77	12.03	8.55	8.04	12.06	16.13	10.74	9.43	7.66	8.44	6.80	6.30	5.91	6.41	
江蘇省	11.79	12.43	9.99	9.35	14.46	18.30	13.22	10.36	9.04	10.13	9.50	8.04	7.81	7.65	
湖北省	11.55	10.80	9.56	9.54	14.29	20.91	9.08	8.77	9.83	10.94	10.00	9.82	9.57	8.51	
山東省	13.67	12.21	11.98	12.72	18.14	23.51	18.49	12.35	11.75	12.06	10.20	9.91	7.67	7.32	
雲南省	13.51	15.10	16.06	21.47	17.95	26.11	11.83	10.86	14.14	15.23	13.00	10.79	10.01	9.29	
廣西壯族自治區				11.80	17.30	29.08	20.08	10.15	10.34	10.55	9.00	7.50	6.69	6.88	
海南省	16.41	11.50	10.35	11.58	12.92	29.26	17.48	10.23	10.26	12.88	11.20	10.16	10.16	10.14	
河南省	11.67	13.91	11.74	12.73	13.98	39.21	10.20	8.04	9.43	10.61	8.50	8.28	8.24	7.66	
青海省	13.76	9.34	10.40	12.64	16.29	40.73	11.68	5.35	8.37	15.53	9.10	9.83	7.79	7.84	
甘肅省	11.59	10.40	11.07	21.27	17.38	41.45	11.48	8.25	10.38	15.55	12.30	11.47	7.98	8.41	
四川省	13.26	11.79	11.82	17.37	19.22	47.78	28.01	14.61	12.82	13.87	11.50	10.76	13.70	13.40	
貴州省	12.10	12.95	12.29	15.18	20.19	49.87	20.04	11.62	17.14	20.66	15.20	13.33	12.65	12.28	
安徽省	11.52	14.22	9.03	12.75	16.59	50.17	8.07	8.23	7.92	8.59	7.20	7.11	6.99	6.87	
西藏自治區												5.88	11.77	7.97	
天津市	8.68	6.62	8.13										5.28	5.95	

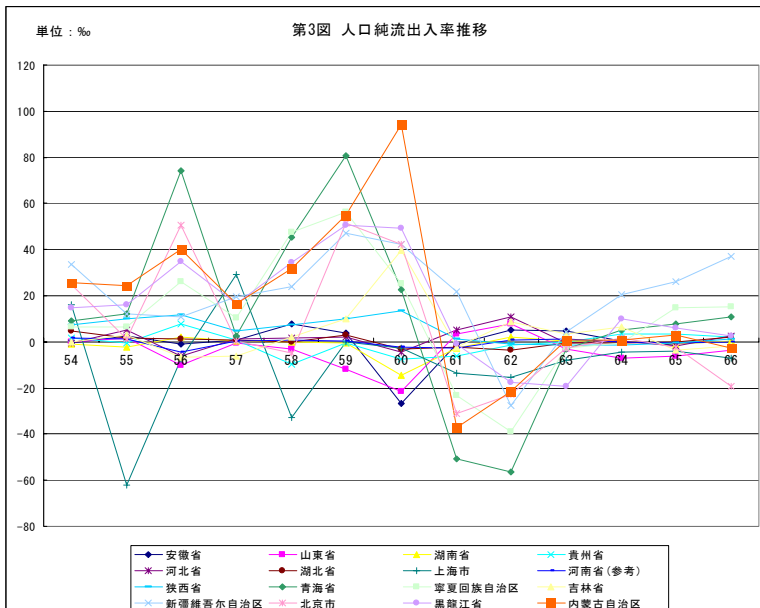


上海市が最も死亡率が低く、最も高かった省は安徽省である。これと合わせて、餓という大社会変動動員を考えると、餓死を避けるために、「食べる所」に人々が移動することが考えられるので、省別の人口の流出入を検討する。

第3表 1960年時点における純人口流出入順位

1960年時点における純人口流出入順位													単位：‰	
	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	
安徽省	-0.68	2.42	-1.04	0.85	7.79	3.75	-26.54	-1.00	5.25	4.87	0.45	-1.34		
山東省	-0.28	1.75	-10.25	-0.51	-3.17	-11.82	-21.42	3.50	7.62	-3.23	-7.01	-6.33	-3.40	
湖南省	-0.99	-2.22	2.27	0.45	0.02	-0.37	-14.53	-2.66	2.20	0.50	0.18	-0.83	0.27	
貴州省	1.64	-0.46	7.66	0.73	-9.59	-0.39	-7.65	-6.25	-1.25	0.09	3.39	3.57	2.05	
河北省	-0.34	4.97	-6.24	1.22	1.75	2.27	-4.63	5.01	10.79	-0.67	0.35	-1.67	2.67	
湖北省	4.51	1.53	1.34	0.77	-0.19	3.17	-3.16	-2.10	-3.46	-0.47	-0.36	-0.19	2.26	
上海市	15.95	-62.08	-7.30	29.19	-33.03	0.11	-2.71	-13.50	-15.31	-8.04	-4.34	-4.11	-7.09	
河南省(参考)	1.81	1.10	-4.50	0.39	0.59	0.19	-2.24	-2.74	0.81	1.26	0.05	-0.64	-0.19	
陕西省	7.53	9.95	11.84	4.55	7.24	9.82	13.55	1.14	-1.15	-1.47	-1.48	-0.72	1.38	
青海省	8.96	12.25	74.00	2.58	45.26	80.87	22.74	-50.61	-56.55	-3.16	5.34	7.87	10.77	
寧夏回族自治区	6.39	6.40	26.30	10.27	47.50	56.08	25.18	-23.21	-39.07	-2.69	-0.69	14.82	15.21	
吉林省	-0.12	3.05	-6.64	-6.21	2.09	10.11	39.50	-2.15	8.43	3.37	6.27	-3.49	-1.81	
新疆维吾尔自治区	33.54	12.21	11.03	19.65	24.12	46.93	42.09	21.89	-27.69	4.26	20.54	26.08	36.82	
北京市	25.01	1.17	50.63	0.17	-4.69	51.49	42.15	-30.89	-22.61	-2.52	1.71	-2.06	-19.26	
黒龍江省	14.71	16.27	34.76	16.68	34.46	50.35	49.14	-1.13	-17.76	-19.21	9.87	5.95	2.37	
内蒙古自治区	25.54	24.37	40.02	16.32	31.66	54.82	94.08	-37.10	-21.68	0.83	0.90	2.77	-2.75	

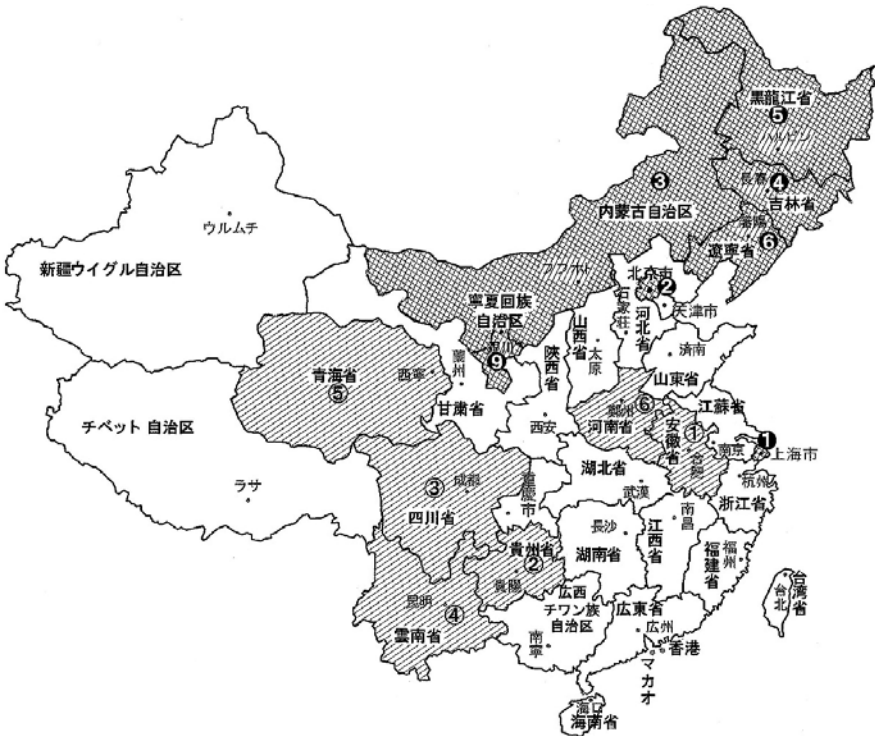
第3図 人口純流出入率推移



第2表で死亡率が最も高かった安徽省の人口流入入を見ると、1960年時点で-26.54%となっている。飢餓を逃れどの地域か不明ではあるが、他の地域に逃れていったことが分かる。山東省にもそうした状況が見られるが、別の要素があるかもしれない。これと反対に、内蒙古自治区、黒龍江省、北京市などには人々が逃げ込んだ様子が伺える。社会大変動期の諸要因がこうした状況を生んだものと思われるが、いずれにしても今後の研究課題である。

以上を総合して、作成した地図が第4図 中国「大躍進期」飢餓地図である。

第4図 中国「大躍進期」飢餓地図



第4表 中国省別死亡・流出入（数・率）順位

	⑨	⑧	⑤	④	③	②	①	①	②	③	④	⑤	⑥
	寧夏回族	遼寧	黒龍江	吉林	内蒙古	北京市	上海	安徽	貴州	四川	雲南	青海	河南
平均人口(万人)	212.6	2541	1752	1363	1127	708	1042	3266	1709	6759	1299	266.2	4904
死亡率‰	13.88	11.45	10.47	10.07	9.66	9.22	6.84	50.17	49.87	47.78	41.45	40.73	39.21
同順位	低9	低6	低5	低4	低3	低2	低1	高1	高2	高3	高4	高5	高6
流出入数(万人)	5.36	25.33	86.10	53.82	106.00	29.84	-2.82	-86.69	-13.06	12.08	-1.22	6.05	-10.99
流出入‰	25.18	9.96	49.14	39.50	94.08	42.15	-2.71	-26.54	-7.65	1.79	-0.94	22.74	-2.24

最も飢餓が深刻だった省は、上から安徽、貴州、四川、雲南、青海、甘肅、河南（以下続く）の各省であり、比較的軽微であった省は、上海、北京、内モンゴル、吉林、（以下続く）の各省である。一般的に言って都市部には飢餓が発生しにくいかもしれない。また、貴州、四川、青海、雲南の各省はほぼ辺境に位置し、農業条件も過酷な地域である。従ってここの被害が甚大であるのも頷（うな）づける。この場合同様に辺境に位置する内モンゴル自治区や東北3省の被害が、比較的軽微である理由はなんであったのか課題ではある。しかし第1位と第6位の安徽と河南の両省は、河南省北部が小麦作、同南部と安徽省が米作の農業地帯である。農村が飢える。不思議な出来事である。ここから推測するに、1960年をピークとする大躍進期の飢餓は、毛沢東・中国のとった対米・ソ対抗策、農業剰余を農村から搾り出し軍需・重工業を自力で強行構築するという「政策」に起因する、「政策飢餓」だったのかもしれない。特に「盟友ソ連の裏切り」に失望した毛沢東が「夢想した農村コンミュン」・「農村が都市を包囲する」大実験場となったのが農村であった。故郷に近くイメージを膨らますことができた農村地帯・「中原の地」が実験場に選ばれたのかもしれない。

古代中国では、王権の争奪を「中原に鹿を逐(お)う」という。中原は漢民族の古くからの生活領域であり、黄河の中・下流域、現在の河南省を中心とした山東省西部、陝西(シャイ)省東部にわたる地域をさす。この地域は、ほぼ周王朝の勢力範囲でもあった。のちに揚子江(ヤンツァン)流域の一帯にも広がったので、中

原の語は河南省を中心とする華北平原をさすようになった。中原の「鹿」は周の王権を象徴であり、いずれにしても中原の覇者は天下に君臨した。そこで古代中国の群雄は、中原の地を舞台として覇を競ったのである。ここを制圧できれば「大躍進」は成功する。皇帝・毛沢東の目は、安徽と河南省に釘付けになったのだろうか。

〔初出「中国社会変動における村落と家族—大躍進から文革期の人口激動」（明治学院大学国際学部付属研究所『研究所年報』第9号、2006年12月、105-113頁）〕

中国社会変動における村落と家族

2008年3月24日発行

発行所 明治学院大学 国際学部附属研究所
所長 高原 孝生
〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518
TEL. 045-863-2267

印刷所 株式会社 ホクシン
〒211-0021 川崎市中原区木月住吉町22番3号
TEL. 044-433-3251
